

下の写真は、小生が、平成 14 年 8 月 12 日午前 6 時過ぎに、知床岬の灯台用の発電施設近くの入り江で餌を漁っている熊を見つけて手が震えながら撮ったものである。崖上からであったので、少しは安心であったが…。それでも、熊が我々のほうを見上げた時には、サーと緊張感が走ったものである。流木をひっくり返したりしていました。どうやら、蟻を食べていたようです。(FDDの容量オーバーの為、写真を掲載できず、従って、小生のHPで確認して貰いたい。)

北海道勤務 6 年余り、知床半島探訪は永年の夢であったが、それが今回凶らずも実現したのである。朝 0530 帯広を出発して、知床八景の一つ“オシンコシンの滝”を見学した後、11 時前にウトロ港に到着、今回の同行者と落ち合い、食材、寝具、大量のお酒を積み込み、アイヌの流れを汲む船頭さん操る遊漁船「ユアシレトコ」(4.9t)は、計画通りに出港した。銅鑼が鳴らなかったのは寂しかったが…

① ウミネコと戯れる！

知床岬に最も近い番屋が目標である。番屋主の畠山氏も乗り組み、湯浅船頭の名案内で、船は、海岸近くを縫うが如く進む。断崖絶壁の連続する中に沢や川の扇状地が処々にあり、番屋らしきものが置かれている。復路に数えた限りでは、10 個程度か。畠山氏によれば正式な番屋を張っているのは、2, 3 軒のみの由。ウミネコやウミウの棲息地である。絶壁にウミネコ、ウミウ、鷗が同居している。雑居ビルと氏は評したが…。そのウミネコであるが、餌を求めて船の周りを乱舞する。家内が右手に掲げたカップエビセンを物の見事にキャッチ、その正確なターゲッティングに驚嘆する。空中に投げられたものをキャッチするのは至難の業のようだ。海に落ちた餌を 2, 3 羽が奪い合う。熾烈な生存競争ここにあり。

② 知床八景等を巡る

ウトロ港に行く途中に知床八景の一つである『オシンコシンの滝』があったので、一寸立ち寄ってみた。二条の滝ゆえに双美の滝とも称され、日本の滝百選にも選ばれている。かなり水量が豊富だ。

小型船ならではのぎりぎりの近くまでの接近である。乙女の滝等の滝、峭岩や熊岩、人面岩等の奇岩は数限りない。乙女の滝は、フレペの滝、即ち赤い水の滝の意味である。富士の伏流水の如くに、羅臼岳の伏流水が、崖の間から数条の滝となって流れ落ちている。また、有名なカムイワッカの湯は見えないけれどもその方向を確認しつつ、百名山の一つである羅臼岳や硫黄山を仰ぎ見ての灯台近くの番屋までの 2 時間半近い船旅である。往路は曇り空であったが、復路は前日と同じくベタ風、快晴に秋の雲が一部にあり、定置網のブイが各所に設置され、海は青黒く澄んでいる。イルカも見られることもあると言うので、期待しつつ。

知床岬は翌日通過して眼前に迫る羅臼岳に圧倒され、国後島と知床連山が見える。4 月下旬から 10 月まで通行出来る。

③ 家内の大漁

番屋に着到、番屋と言う名前から何となく掘っ立て小屋みたいなものを想像していたが、なんの、普通の民家と変わらぬではないか。昔は、番屋守を置いたそう。網に付いた魚を野

鼠が食べに来るので、猫で鼠退治をした。その猫の面倒を見るために人が番屋で越冬した。今は網も鼠にかじられる事も無いので、番屋守を置くことは少ない。我々が宿泊した番屋は、数年前に熊に侵入され、冷蔵庫の外と中を傷つけられ、全国放送された番屋であった。隣のウニ番屋では、熊の侵入防止の為に戸板に6寸釘を碁盤状に打ちつけたものを窓に打ち付けてあった。さて、荷降ろし、搬入を終えて夕食の魚を採りに沖合いに出かけた。不思議なこともあればあるもので、釣堀は勿論海釣りなど全く初めての家内の竿にカレーが次から次へと面白い位にかかる。私は恐れる、これで病み付きになられたら、私が餌付けから魚の外すのまでやらねばならなくなると。(大名の釣りは最高だろうが・・・) ベテランの指導の宜しきを得て、それを忠実に実行したからだろう。小生は勿論他の者も顔色なしであった。

カジカは結構釣れたのだが、リリース以外に策なしだ。ところが、ウミネコに馬鹿にされたもので、僕らがカジカを釣るのを待っているのである。悔しいが、彼らの餌を釣ってやっているようなものだ。2羽の間に投げ入れると奪い合いになる。カジカをお互いが口に挟んで引っ張り合う様は彼らの世界の厳しさを感じさせる。悔しかったが、何処に行っても付いてきた。

④ 海鮮バーベキューに舌鼓

釣りが終わったら、番屋の土間で、神戸からみえたと言う他のグループも一緒に海の幸を堪能する楽しい時間である。ビールが殊のほか美味しい。馬糞ウニを割ってそのまま食べたが、これが中々美味である。吃驚したことには、中に昆布や藻が入っているのだ。ウニが何を食べているか一目瞭然である。北海道は馬糞ウニが多いそうだ。粒が小さく、とろりと溶ける美味しさで紫ウニの何倍かの値段だというが、食べたい放題だ。焼きウニもまた格別だ。

烏賊やタラバガニも焼くと香ばしい。ホタテも見たことも無い位に大きい。烏賊は内臓をとらずに焼いたのがより美味しい。

毛蟹もある。極めつけは、畠山氏がその昔、創作したとも言う「チャンチャン焼き」だ。高々15年位の歴史だそうだ。北海道の伝統的料理かと思いきや、意外なり。何故、「チャン」と言う例の子連れ狼の“大五郎”のチャンだそうだ。男の簡単栄養料理である。野菜たっぷり栄養バランスも良い。最後の仕上げは、脂が乗った秋味といわれる今が旬の鮭入りのスープである。ビールやワインで適度に酔った身にはこれが有り難い。第二段は座敷での宵が更けるまでの談論風発だ。こうして、番屋の夜は暮れた。残念ながらペルセウス流星は、曇天等の為に確認に至らなかった。唯単に飲み過ぎただけではないのかとの声を聞こえてくるが・・・何れにしても、もしかしたら、満天の星が見えたらうに。

⑤ 知床灯台探索

朝5時起床、洗面・着替えもそこそこに、小生を含む4名知床岬灯台散策としゃれ込んだ。鹿の群れとひょっとしたら熊を遠望出来るかなとの淡い期待を秘めつつ、番屋から約10メートルあまりの海岸段丘を滑りながらも登る。上ってみると、丈の低いススキ等が生えている一面の段丘・平坦部である。右手からは、植生が降りてきている。鹿の群れを発見、鹿は警戒心が強い動物なのだろう。鹿鳴、短一声で、瞬く間に森の中に消えていく。30分余りで、灯台下に到着、灯台は崖の上に建設されているので、228段の階段を登る。この灯台は、昭和38年8月に竣工されたものである。灯台からは、遠く国後島が臨まれ、『返せ』と叫ばずにはおれない。羅臼岳から硫黄山と縦走して、灯台に来れない事はなかろうが、獣道があるの

みか。そういう意味においては最高の番屋に泊めて頂いたものだ。灯台への給電の為の発電施設が入り江の上に設けられている。帰路に入り江の状況を確認する。

⑥ 岬で罨と遭遇、ルシャで6頭発見

知床岬灯台からの帰途、発電施設のある入り江付近通過時、灯台見学かと思った昨夜同宿の御夫婦がなぜか引き返したので、訝しく思っていた。彼等に出遭ったところ、『熊がいました』と青ざめ顔で話すではないか。発電施設の手前付近の入り江の付近に居たと言う。皆で行ってみようと話は簡単に決まり、おっかなびっくりで、何時でも逃げ出せる態勢を維持しつつ、回りをしっかり警戒しての前進だ。最後の勇を鼓して、入り江を覗いたら、確かに熊らしきものが居た。流木らしきものと戯れているようだった。聞くところに因れば、蟻を食べている。

前日にルシャの付近で熊が居たとの話もあったので、居るかも知れないとは思ったけれども、良い条件で遭遇出来たものである。番屋を辞そうと言う時に、罨の調査中であると言ううら若い女性3名と男性1人に出会った。彼女らは女性のみで我等が発見した罨を確認に行くとも言う。大丈夫かなと危惧するも彼女等は、元気よく出かけた。奇禍に遭わねば良いが。

さて、畠山氏の番屋を後にして、ウトロ港に向かう。興味はただ一点、海岸端に熊が何頭いるかだ。昨日も居たと言うルシャにはまず、母親と子供熊2頭の3頭が仲良く遊んでいた。ルシャは、川が海に注ぐ地域で扇状地が形成され、今頃は熊は鱒を採りに来るのだそうだ。この親子もそうだったのかもしれない。ユア知床号の船長は見事に船を操って数十メートルの近くに寄せて呉れる。海上に居ると言うのは絶対安全地帯であるので、罨に手を振ったりして暢気なものだ。山の神とアイヌで称される熊も、我等が人畜無害と知って知らずか悠然たるものだ。

さて、更にもその親子熊とは反対方向になにやら黒く蠢く者がある。成獣3頭が居るではないか。歓声上がる。同じく近寄って双眼鏡で観察する。熊撃ちの免許を持って居る同行者曰く、4～5歳ぐらいでしょうと。うなじが黄色くなり切っていないとも。

熊牧場では罨は何頭も見ているが、野生の熊を斯様な近くでこの様に多数見られたと言うのは正に僥倖以外の何物でもない。

⑦ 北方4島を臨みて

久々に北方領土を近間で見た。帯広までの帰路を知床岬から羅臼経由としたのである。知床岬からの眺望は、雲も少なく、全景を確認することが出来た。納沙布岬も良いけど、知床岬からの北方領土の眺望も悪くない。

⑧ 斜里町と弘前との関わり！

斜里町は、青森県弘前市と姉妹都市盟約を締結している。これはかつて、文化4年(1804)に津軽藩兵100名が斜里警備のために派遣された。ところがこの兵士が水腫病に罹り、翌春に掛けて70数名が死んだ。この事実が、最近明らかになり、昭和58年(1983)に姉妹都市となったものである。屯田兵以前に奥羽諸藩が北辺の警備に任じたのは管内の屯田兵を調べた時(朔東第33号参照)に成る程と感じたのであるが、それがこの様な縁になっていると言うのも面白い。